

学習会(子ども会)だより 7月号 前編
MY SKY 第6号
 マイ スカイ

1995年7月11日火曜日発行(毎月第2・第4土曜後の火曜日定期発行)

発行者

板野中学校
 学習会
 編集・文責: 吉成 正士

今まで「MY SKY」をいくつか書いてきましたが、「タイトルがなくて読みづらいなあ」ということを、自分で発見してしまいました。したがって今回から、タイトルをつけて書き綴^{つづ}っていくと思います。

ちなみに、とうとう私のパソコンがぶっ壊^{こわ}れてしまい、今回の「MY SKY」の発行が遅れてしまいました。ごめんなさい! おーい私のパソコンよ! 早く帰ってこーい!



◎お母さん! 実は私^{わたし}の先祖^{せんぞ}は…日本猿^{にほんざる}なんです! (6月27日: 江嶋修作先生講演会より)

みなさん、江嶋先生の講演はどうでしたか? このタイトルになっている言葉をみなさんは覚えていますか?

結婚を反対されている部落の青年と部落外の娘さんの間を取り持とうと、江嶋先生が中に入り話をすることになったんですね。その時に娘さんのお母さんは、差別者の醜^{みにく}い表情を顔に表しながらこう言ったんです。

母 「私の家はきゅうか(旧家)ですから……(そんじよそこらの人は相手にできません)のよ、おほほほほ)←恥^{はにか}出してない謀^{はく} ←しかも! 蛇^{へび}く人をハ^ハかしたような目つき
 江嶋 「は? あっそうですか。私も今、きゅうか(休暇)中でして」
 母 「……(目^めが献^{けん}態^{たい})……私の家は先祖^{せんぞ}代^{だい}々^{たい}の家系^{かけい}図^ずがございまして……」←ここで先祖の自慢話が始まる
 江嶋 「(笑)お母さん! 実は私の先祖は……(丸^{まる}腰^{こし}おいて)……日本猿なんです!」

いいですねえ、このセンス! けどそれだけではなくて、自分に誇^{ほこ}りを持てず、先祖^{せんぞ}にすがろうとしている人間の愚^{おろ}かさや、差別社会のばかばかしさを鋭^{すど}く、しかもユーモラスに表現しています。差別を許してしまう人間、する人間にはなりたくないですね。

もともと地球上のすべての生物は、同じ所から出発したはずです。そのことを考えると、人が人を差別することがいかに愚かなことであるかということが、すぐにわかります。それは人間同士だけではなく、すべての生物が互いに慈^{いつく}しみ合いながら生きていかなければいけないということですよ。つまり、同和教育は部落問題のみならず、環境問題^{かんきやうもんだい}をも含んだ教育であるということがいえます。そういう点で私たちは、部落問題をテコにして、

身の回りにある、ありとあらゆる社会問題を考え、それらをより良く変えていく教育を積み重ねていかなければいけません。それが、地球上に存在する生物「人間」としての当然の仕事ではないでしょうか。

次に、講演会の感想文が届きましたので、その中のいくつかを掲載しておきます。

江嶋先生の講演を聴いて、教えてもらったこと。

一つめは、差別は犯罪だということ

二つめは、人が差別をするときはすごく醜い顔になるということ

私がお母さんに差別の話をしたときに、何か困ったような顔をしていたと思います。もうそこで差別をしています。私のお母さんが、もし講演会に来ていたら、少しだけ変わっていたような気がします。江嶋先生自身がキラキラと輝けているのだから、キラキラとした宝石のようなものなんていない。ありのままの自分「キラキラ自分」を、よりいっそう江嶋先生はあの舞台で輝けたような気がします。 2年生女子

※

今日は江嶋先生の話を聴いて、とてもよかったです。江嶋先生はとてもキラキラした人ですね。

私はこの講演を聴く前は「おじさんが言うけん、固い長ったらしい話だろうな」って思っていました。でも私たちに合わせて「スラムダンク」というアニメの話をしてくれたり、今の人気のドラマとか聞いたり「すごい心配りだなあ」「いい人だなあ」って思いました。

それに江嶋先生が女の人を自分の養女にして結婚させてくれた人だったんですね。私はこの話を森口先生から聞いていて「こんないい人がいるんだなあ。すごいいい心をもっているなあ」っていつも思っていました。それがあの江嶋先生だったので、すごい嬉しかったです。

江嶋先生はお父さんにしたいくらいステキな人ですね。ほんの少し話を聞いただけでわかりました。もう、先生を気に入ってしまいました。また来てほしいです。

2年生女子

※

今日は江嶋先生の講演会がありました。

江嶋先生といえば全国で有名なので、前々から緊張していました。そんな感じで話を聞いていたけど、全く違うと感じてきました。まじめで固い人だと思っていたけ

ど、何かゆとりがあつて楽しくて、そして頼^{たの}もしい人でした。

それより驚^{おどろ}いたのは、江嶋先生もこの講演で緊張していたということです。もう「朝メシ前^{あさまえ}！」って感じで話しているのかと思っていました。(笑)

「差別することは犯罪だ。差別することは罪である」と言っていました。イギリスで差別にあったとき、立ち向かったというのはすごいと思いました。私は江嶋先生のこの講演から、いろいろ学びとっていきたいです。

私のお母さんは「江嶋先生って頼^{たの}もしいなあ」と言っていました。講演についてどう思ったかは聞いてないけど……。これを機^き会^{かい}に頑張^{がんば}っていきたいです。2年生女子

※

……お父さんは今日来ることができませんでした。「すごかったよ。とてもおもしろかった」と言えても、具^く体^{たい}的^{てき}に話^わすことが全然できません。言いたくない弱さがあるので、言うことができません。けど「もし聞いてたら考え方が変わる。自分で自分が変わっていける」と思うから、今度こういう機会があつたら、絶対来てもらいたいです。そしてそのことについて話し合えたらと思っています。 2年生男子

後の二人のように、この講演をきっかけにして家で話し合いができているみなさんもあるようです。広がっていくことが大切ですから、本当に喜ばしいことです。

また、江嶋先生には日を改めて板野町に来てもらおうと思っています。その時にはより多くの人に話を聞いてもらいたいと思いますので、ぜひとも声をかけ合いながら、大人も子どもも参加してみてください！よろしく！



①人間に光^{にんげん ひかり}あれ！(7月5日：四国地区同和教育^{しこくち くにどうわきょういくけんきゅうたいかいぜんじつぜんたいがくしゅう}研究大会前日全体学習より)

今学期最後の全体学習が、2年E組によって2年全体学習として行われました。

校外の参加者は200名にもおよび、四国4県からはもちろん、兵庫^{ひょうご}、岡山^{おかやま}、広島^{ひろしま}、遠くは石川^{いしかわ}、岐阜^{ぎふ}からも参加がありました。しかも今回は小・中・高校の先生方だけでなく、県外や本校の保護者の方々、大学生の参加もあり、より一層全体学習をきっかけにした同和教育の広がりを感じることができました。

そんな中で、まず初めに、今回初めて参加した徳大解放研のみなさんの感想を紹介していきます。

……全体授業が終わってから参観に来た一人ひとりに自分の意見・感想を言う時間を

^{もう}設けてほしかった。なぜならば

① 今日のままだと、発表をした生徒たちは自分をよく変えることができるが、参観に来た一人ひとりはずただの傍観者^{ぼうかんしゃ}で終わってしまうからだ。自分の裸^{はだか}の心をさらけ出すと、きっと自分を変えていけると思う。

② 次に、参観に来た人が後ろにいて、生徒たちの発言などを聞いてそのまま何も言わずに帰ってしまうなんて、絶対不公平^{ぜったいふこうへい}だと思う。

この全体学習に来て本当によかった。次も来たい。

徳島大学解放研究会

※

初めて参加させていただきました。

昨年の全同教大会で森口先生の講演をお聞きしとても感動したのですが、一方でこの全体学習の取り組みで語らせていくことの、次の一步が踏み出せるのだろうかと思っていたのです。でもそうではないことがよくわかりました。みんなが気づいているか気づいていないかの差はあっても、生き方の問題として捉えているなと思いました。友達の思いに一生懸命に応えようとしている。この姿勢が間違った考えを必ずや変えていく力になると思います。世の中の不正義^{ふせいぎ}に腹を立てながらも、迎合^{げいごう}し、事勿れ主義^{ことなか しぎ}を決め込む生き方がどんなに冷たいものか。板野中のみなさんはこれを打ち破っていくことができる仲間になっていくでしょう。

私も中学校のとき、友達の部落民宣言を受けて変わった一人です。自分自身の怒りでなけりやダメだと気づいていったのは、高校解放研に入ってからでした。

今日の授業を絶対忘れません。名前はわからないけど、みんなの声、思いを刻み、生涯をかけて部落解放——全人民解放^{せんじんみんかいほう}へ取り組んでいきたいと思います。大学に帰って、今日来れなかった仲間に報告し、討論していきます。私たちも今、水平社の闘いの歴史を学習しています。

授業をされた先生方、駐車場整理をなさってくれた先生方、大変ご苦労さまでした。

お互い頑張っていきましょう。

徳島大学解放研究会

今回の全体学習をきっかけにして、これからも参加していただけるようです。そうしていくうちに、きっと大学生からの発言も出てくると思います。心強い限りですね。また、共に闘っていく仲間を広げることができますね。

私自身が同じ徳島大学に通っていた何年か前、解放研があるということすら知りませんでしたし、私自身、今と比べるとすごくいい加減な人間だったように思います。それは社

会に対する反発だったのかもしれませんが、それにしても冷めた、いい加減な人間でした。被差別の立場にあるみなさん、ごめんなさい。私はその時、この問題に対して興味・関心もなく、差別を許し、していた人間であつたと思います。そう考えると、徳大解放研のみなさんがすごく輝いて見えます。遅ればせながら、私も一緒に歩かせてくださいね。

また、最後からの二行目、すごく心^{こころ}救われる思いがします。「よく気がつくなあ」と思います。本当に真剣に取り組んでいる人は、こういうふうに周りが広く見え、すべてに優しくなれるんでしょうね。

まだまだこれから！がんばりましょう！

他にもたくさんの感想が寄せられましたが、すべてを載せるわけにはいきません。心に留めておきたい一文を取り上げて、次に載せます。

……こんなことを、こんな問題を今まで残しておき、子どもたちまで巻き込んでしまう部落差別を、大人は反省すべきだと思う。
愛媛県北宇和郡

※

……自分は一人。でも、一人の人が身近な一人を変えていったら……。クラス40人。学年でその数倍の人と向き合うことができる。しかも板野中で毎年毎年入学してくる子どもと家族が向き合えたらすごいと思う。「いつ、どこで、何を、どうするのか」という意見の「どこで」というところを、自分の家族の中でというふうに考えたい。

愛媛県大島高校

※

……思わず鳥肌^{とりはだ}の立つようなすごい時間でした。……

愛媛県今治北

※

「輝いていても、すぐ光を失ってしまう」そう話していましたが、それは次のさらなる強い光を放つために、磨かれているのでは……。だから暗くなっているように感じると思いました。

無記名

※

……部落問題学習を喜びとしているTくん。ご家族の生き方を自慢^{じまん}できた彼の発言に全身が震え^{ふる}、言葉では言い尽くせない感動を覚えました。鳴門教育大学(池田第一中)
なるときよういくだいぐく いけだいいいちゅう

※

大変すばらしい授業でした。たくさん記述^{きじつ}したいことがあります。すべてを胸の中に、頭の中につめ、愛媛に帰ります。これからの私にとって板野中の授業が大きな

力となりました。板野中の生徒のみなさん、大変りっぱです。これからも頑張ってください。

私も対象地区出身者です。ありがとうございました。

愛媛県^{ひろみ}広見町

※

同じように部落出身教師として、また新たな気持ちで頑張るぞ！

——よき日のために—— 人間に光あれ！

無記名

次に保護者の感想文を一つ読んでみてください。

1年生の家庭訪問から活発に家庭で部落問題について話し合えるようになってきつつあります。

主人の方の身内^{みうち}とはこのテーマについて話せるけど、私の親とは言ってはいけないことで、ずっと^き避けていました。どうして言えんのか、頭の中で「わかってもらえん」と初めから決めつけているようで、何でも言い合えるようになりたい。

正しい知識を一人でも多くわかってほしい。

人の口から口へと伝わって「あそこの家は部落」っていうのが、時を越えてずーっとずーっと残って、何百年も時を越えて残っているのは恐ろしいことで、本当になくなってほしい。

板野中学校保護者

これが現実です。こういう思いで今日も、この一瞬にも悩んでいる人がたくさんいると思います。もしくは、悩むことすら避けて、自分自身を無理矢理^{むりやり}納得させている人もいると思います。それは、社会の中で、日々の生活の中で生きていくことに精一杯で、他の人々とのつながりすら引き裂かれ、団結するよろこびも知らず、知っていたとしても忘れてしまわざるを得ない環境にされているのだと思います。

みんな同じ思いが底に流れているのに、それを吐き出す場がないんだと思うんです。結びつく場がないんだと思うんです。今そのバラバラにされている細い細い一本ずつの糸^{いと}を束ね^{たば}、少しでも太い一本^{つな}の綱を作っていきましょう！一本だから弱いんです。束ねれば強くなるんです。そのことを、ねばり強くやっっていこうじゃありませんか！

最後に、生徒のみなさんに多くの方々がメッセージを贈^{おく}ってくれましたが、それらを代表して次の感想文を記しておきます。

生徒が本音で自分の意見を述べている。これまで板野中が取り組んできたことが、気の遠くなるような先生方や生徒たちの積み重ねであることがよくわかります。

どうしなければならないか。^{けんきゅうろんぶん}研究論文で、^{せんもんしょ}専門書で、^{けんきゅうきょう}研究紀要でうまくまとめら

れています。でも、生徒が本音で語り合い涙しながらたどり着くようにならなければいけないんだということ。この問題が根深いものであり、幅広く人の心の核心を突くものである以上、生徒が、先生が本音で勝負しないと話にならないことに、十分すぎるほど気づきました。

生徒のみなさんへ

あなた方は本当に幸福です

この板野であればこそ自分を見つめるチャンスを得られたのです

あなた方は本当に立派です

板野中で温かい血の通った仲間たちと支え合っています

あなた方は本当に輝いています

ありあまるエネルギーを外ではなく、自分の心の玉に向けることを学んでいます
それが輝ける人だと思います

今日、そう気づきました。ありがとう。

たかまつしきょうわちゅうがっこう
高松市協和中学校



◎民主主義 平等を求めて② 教育と理解が結婚実らせた (6月17日:朝日新聞より)

前回の「MY SKY」に載せました朝日新聞の記事の続報です。

今回の記事には竹内さん自身のことが載っています。読んで、考えてみてください。

七十三年夏のお盆、一家で妻の実家に行った時、夜ふけに外の騒ぎで目を覚ました。

日照りで地区の貯水場に流入する山水が枯れ、翌朝の飲み水もない、というのだ。

なぜ、自分たちの地区だけに水道がなく、飲み水にさえ困るのか。長年の悔しさと怒りが一度にこみあげた。

「子どもたちが大人になった時も、親と同じ思いを繰り返すのか。ようし、一人でも闘ってやる」。決心したとたん、心が晴れた。興奮で眠れなかった。だが、闘う相手も方法もわからなかった。

水道行政の仕組みを知ろうと、県庁へ行った。そこで初めて、自治体の負担は十五分の一で、残りは国が補助する同和対策事業をできる特別法があるのを知った。法律は十年期限で、施行後すでに四年もたっていた。

翌年、同和対策事業で水道が来た。すると、周辺の住民から「同和地区とみられて迷惑だ。出て行け」という匿名の投書や落書きが相次いだ。水道実現の喜びよりも、

地区の人たちのおびえは深く、再び沈黙した。

「部落はみじめで当たり前、みじめでなければいけん、というのか。むき出しの差別意識にぞっとした」と竹内さんはいった。

同和対策は、行政が被差別部落の内と外に、対策の意味と人権意識を啓発していかないと、どんな事業も裏目に出る。地区に「同和というレッテル」を張るばかりか、「上見て暮らすな下見て暮らせ」という意識に浸ってきた近隣の人々を刺激する。

竹内さんは子どもが高校に入ると、「うちは差別を受ける家ぞ」と教えた。知らないで差別に直面すると、どんな悲劇が起こるか。兄妹は半信半疑で聞いていた。

息子は恋愛結婚の寸前、相手方から遠回しに出身を指摘されて泣いた。娘は、見合いで相手と意気投合したが、親族の反対で破談になった。

息子の二度目の相手方にも反対はあった。が、「市の広報をずっと読んでいて、差別はあっちゃいけんこととわかっるとる」という相手方のおばさんが応援をしてくれ、結婚にこぎつけた。娘の結婚相手も「同和教育で差別の誤りを知っている。苦労があっても負けません」といった。

竹内さんは、教育と啓発の力を信じ、期待する。 朝日新聞1995年6月17日付

教育の重要性は、私たちが感じている以上に大きいものです。私たちは、今その真つた中にいます。それは、生徒も教師もです。その大切さに立ち返り、互いに学習を積み上げていくということをしていかねばなりません。

部落に生まれたことは、恥ずかしいことではありません。部落に生まれたことを恥ずかしがることが、恥ずかしいのだと思います。しかし、そうとしか思えないような生き方をさせられてきたことも確かです。だからこそ、私たちは「そう思わせているもの」にしっかりと目を向け、それぞれが自分を見つめながら、学習を積み重ねていかなければならないのだと思います。

私たちの子どもの時代には結婚差別で悩む人がいないよう、今、私たちが真剣に取り組んでおくのです。

この記事に興味のある人は、ぜひとも読んでみてください。もし家で朝日新聞を取っていないのなら学校にありますので、読んでみてください。

ちなみに、竹内さんと江嶋先生は共に地域起こしのために闘った、昔からの仲間だということも書き添えておきます。



◇◇ 今後の日程 ◇◇ ◇

夏休み中にもいろいろなイベントが催されます。特に一泊研修には、日頃学習会に参加できていないみなさんも、できるだけ参加をして、この問題についてとことん話し合いをしようではありませんか！食べ物も空気もすべてが新鮮な「あいあいランド」で！

またその他にも、県下の部落解放を願い活動している高校生が集う県 奨や、その全国版の全 奨もあります。ぜひとも誘い合わせて参加してみましょう！詳しくは、各学年の同和教育担当の先生、または阿部、吉成まで！

★7月21日(金) 徳島県部落解放高校生奨 学生集会 (徳島市：郷土文化会館)

★8月3日(月)～5日(土) 全国部落解放高校生奨学生集会 (高知市)

★8月8日(火)・9日(水) 学習会一泊研修 (相生町：あいあいランド)

部落の起こりとその歴史 第4話「仕組まれた悲劇・非人」

前回、戦国時代から農業生産の時代にかけて(1600年代後半～1700年代)被差別部落の生活がどう変えられてきたかということについて、お話しました。

今回は、ちょうどその頃「えた」と同じく被差別の立場にあった非人の人々が、どういう理由でその身分にされ、どんな生活を強いられ、その後政治の中にどのように組み込まれていったかということについて記していきたいと思います。

1600年代の中頃、阿波では村はずれの野原やお堂などで、小屋がけ(渋紙や筵などで雨露をしのぐだけの粗末な掘立て小屋)をしてその日暮らしをしている人々がいました。どうしてそんな生活になっていったのでしょうか？

農業生産の時代に入り、年貢取り立てが強化されていきました。しかし災害や自然条件によって、農業自体も大きく揺れていました。そんな中で、どうしても年貢を納めることのできなかった農民は、生活難に陥り、没落し、乞食化せざるをえませんでした。こうして非人身分は、没落農民を中心に形づくられていったのです。

よく『犯罪人が非人身分とされた』と言われていますが、それはごく少数の例しかありませんし、時期も身分差別が本格化してくる江戸時代中期以降です。非人身分の原形は、農業生産力の未熟な時代における、藩による強制収奪が原因なのです。

乞食化せざるをえなかった人々は、1600年代後半から次第に、非人という身分で呼ばれるようになっていきます。この頃、藩としては乞食(非人)が各地をうろつくことは、村の治安を保つうえでも、農民を確保し農業生産を高めるうえでも都合が悪かつ

たのです。

そんなとき、万治元年(1657年)には次のような通達が藩から出されています。

身体に障害があったり、病気がちな乞食についてはこれまで通りでよし

身体が違者で労働に耐えうる者については、故郷の村に帰農するように処置せよ

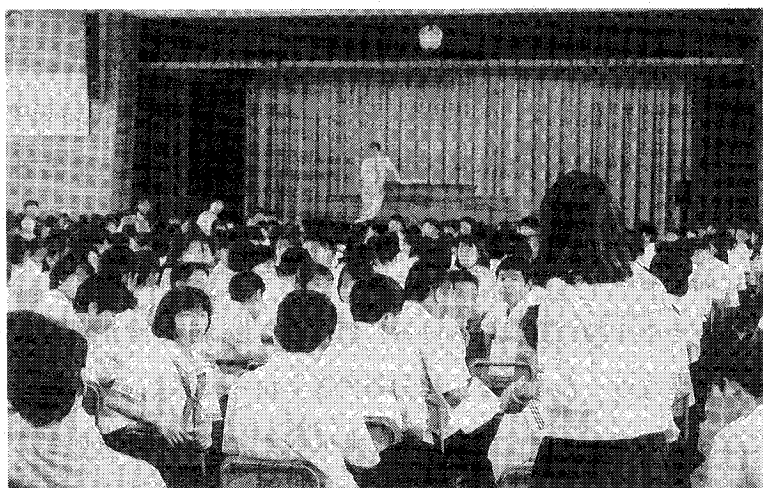
ところが、しばらくして町や村に仮住まいをする乞食を、その村の庄屋(村の有力者)の配下として登録するようになります。そして「抱えてやった」「抱えてもらった」という意識の中で、様々な雑用につかされました。夜の見回り、死体の後始末、捨て子の養育などです。その後徳島藩では、元禄10年(1697年)に、酒の密造・密売を防ぐため、その監視や隠し酒を摘発するのに利用しています。そのうえ、違反した者を逮捕する権利も与えられるようになっていきます。つまり、下級の警察権が認められたわけです。

元禄14年(1701年)になりその内容は広げられ『①盗難事件の取り締まりと犯人逮捕 ②農作物の盗み取り監視 ③牛馬盗みの監視 ④賭け事の取り締まり』とされました。番非人制度と呼ばれるものです。

農民たちにすれば、日頃さげすんできた非人によって、今度は逆に監視されるのです。差別意識をかきたてるのは当然です。こうして、民衆同士の対立・反目は深められ、政治の力によって、同じ苦しい立場の仲間同士が憎しみ合うという悲劇を演じることとなったのです。

次回「華やかな時代のかけで」

「やさしい阿波の部落史」より改編



江嶋修作先生講演会（6月27日：本校）